

発刊にあたって

私が循環器画像技術分野の仕事に携わって30年近くになろうとしています。しかし、血管造影の歴史をひも解くと、実はさらに古いことがわかります。1927年、ポルトガルの神経科医エガス・モニスは、像の陰影で脳の腫瘍や動静脈奇形などの神経性の病気の原因を診断する方法として脳血管造影法を開発し、1927年に最初の脳血管造影をリスボンで行いました。続いてレイナルド・C・ドス・サントス医師が、1929年に初の大動脈造影を行いました。1953年に新たなカテーテル挿入法としてセルジンガー法が確立されてからは、血管撮影にとどまらず、動脈塞栓術、経カテーテル的薬剤注入、血管狭窄や閉塞に対する経皮的血管形成術、メタリックステント留置、門脈圧充進症への胃食道静脈瘤塞栓術や経頸静脈肝内門脈静脈短絡術、大動脈瘤に対するステントグラフト留置、肺血栓塞栓症防止を目的とする下大静脈フィルタの留置、血管内異物除去、血栓除去など、IVRの進歩には目を見張るものがあります。これらは医師をはじめとしたメディカルスタッフ、装置や医薬品、そして数々のデバイスを開発してきたメーカーの方々といった先人たちのたゆまぬ努力と治療への信念の上に確立されてきたといっても過言ではないでしょう。

私は、これらの歴史のわずかな頁を知るに過ぎませんが、血管撮影とカテーテルを用いた治療、いわゆる塞栓術や拡張術、それは非血管、血管を選ばず、それぞれの手技、撮影法、装置などの変遷、また技術向上、放射線防護技術の進歩、装置の開発、アナログからデジタルへの移行、造影剤の進化、CTやMRIの応用、そして数々のデバイスの開発など、時代とともに経験し現在に至っています。

そして今回、2014年3月に循環器画像技術研究会の発足30周年記念として出版された『心血管画像技術完全ガイドブック』に続き、第2弾として『血管画像技術完全ガイドブック——頭頸部・胸部・腹部・四肢——』を企画、出版するに至りました。

内容は、基礎編として、装置器材・周辺機器およびデバイス、カテ前・カテ中・カテ後の情報の捉え方、血管撮影領域におけるデジタル画像、画像ネットワーク、安全管理、医療器具を解説、臨床編として頭頸部領域、胸部領域、腹部領域、四肢領域の疾患について、詳細にかつ解りやすくまとめました。各パートを担当した執筆者は、前刊同様、本研究会の幹事であり、それぞれに各施設で医療の最前線で活躍される選りすぐりのスペシャリストの皆さんです。

本書が、循環器画像技術分野のみならず、チーム医療を含めた、臨床・教育・研究において、医療の現場で、また教育現場で、できるだけ多くのメディカルスタッフの方々に活用いただければ、企画者のひとりとして喜ばしい限りであります。

最後に、執筆いただいた皆様、そして発刊に際してご支援とご協力を頂いた多くの方々に厚く御礼を申し上げます。

2015年6月吉日

循環器画像技術研究会

顧問 加藤 京一

(昭和大学大学院保健医療学研究科教授)